

2019.10.12

読売新聞（夕刊）

不整脈が原因で起つる脳梗塞を防ぐため、血栓（血の塊）ができるやすい心臓の一部を医療機器で塞ぐ治療が、9月から公的医療保険で認められるようになつた。

不整脈の一一種である心房細動を発症すると、心臓内で血流がよどみ、血栓ができるやすくなる。特に、左心房から突き出た袋状の「左心耳」と呼ばれる場所に血栓ができるやすいことが知られている。

今回保険で認められるようになった治療は、網目状の器具で左心耳を塞ぐことで、血栓の原因となる部位への血流を防ぐ。太ももの静脈からカテーテルという細い管を通して挿入し、心臓まで器具を運ぶ。胸部を切開する手術は不要で、入院期間も

4、5日程度という。

心房細動の持病のある患者はこれまで、血液をサラサラにする薬を服用することで脳梗塞の原因となる血栓を防いできた。ただ、長期間使い続けると、脳出血や消化管の出血が起こりやすくなる患者もいる。新たな治療は、こうした出血リスクの高い患者にも有用という。

この治療は、日本循環器学会の専門医が複数在籍する研修施設など、一定の基準を満たした医療機関で受けられる。すでに実施している仙台厚生病院（仙台市）循環器内科医師の松本さんは「心房細動による脳梗塞は重症化しやすく、生活の質も著しく低下する。患者の負担も少なく、新たな治療の選択肢になるだろう」と話している。

不整脈による脳梗塞防ぐ器具 保険適用に